



～ 学校便り～

なつめ 9月号

〈編集・発行〉
鹿児島市立喜入小学校
〈発行日〉
令和2年9月25日



熊本市役所展望所から熊本城を望む子どもたち

「できる」喜び

校長 内村 英人

「数か月ぶりにガイドをします。」

修学旅行で訪れた熊本城のボランティアガイドの方は、そうおっしゃいました。コロナ禍によって、自粛が長く続いていた熊本城ボランティアガイドが、本校の修学旅行で再開されたのです。

修学旅行の実施については、当初の計画どおりに熊本へ行くか、県内旅行に変更するかで、迷い続けました。両県や全国の感染状況の変化を注視しながら、感染

防止対策の検討や学校医との相談を重ね、旅行業者にはぎりぎりまで返答を待っていただき、8月31日に熊本行きを決断しました。

当日は、Goto トラベルのおかげでバスを1台増やしての余裕のある座席配置、SAでの休憩のたびに車内の換気、バスの乗り降りの度に消毒と検温、もちろんマスクは着用、熊本の城彩苑ではVAシアターも間隔を開けた座席配置、ホテルでの入館式・退館式はなく従業員の方々との接触は必要最小限、食事の座席も間隔を空け、部屋は5階を貸し切り、グリーンランドの絶叫系アトラクションも間隔を開けた座席配置と消毒等々、感染防止のガイドラインに則した対応が行く先々でとられていました。城彩苑では、開店していない店舗もあり、常時開店することはできない経営状況にあることがうかがえました。例年とは違う様々な制約があった修学旅行でした。しかし、そのような状況下でも旅行を楽しむ子どもたちの姿は、守るべきことをきちんと守れば、楽しく充実した活動ができるのだということを感じさせてくれました。

熊本城のボランティアガイドの方々も、嬉しそうでした。熊本城の説明に熱心に耳を傾け、時に感嘆の声を上げ、質問をする子どもの姿は、ガイドの方々にとって、熊本の歴史遺産の価値と復興を目指す人々の努力や思いを伝えるという使命をやっと果たすことができるという喜びのみならず、未知のウィルスによって失われていた日常を少しずつ取り戻す喜びをももたらしたのではないかと感じました。そういう意味でも、隣県鹿児島から熊本へ行ったことの意義があったように思うのです。

今までのようにはできないことがあります。しかし、この状況を可能な限り正確に理解して、工夫することで「できる」喜びを味わえるようにしたいと思った修学旅行でした。

バスの中で、子どもたちは「旅立ちの日に」を歌いました。卒業式で歌う予定の曲です。子どもの歌声を聞きながら、卒業式当日、歌わせてあげたいと切に思いながら帰ってきました。

【本年度の一事徹底事項】「元気なあいさつ」

2学期当初のあいさつには、夏休みが抜けきっていない感じがありました。最近は、「元気な声」は6割、「立ち止まっておじぎ」は4割、「自分から進んで」は7割の子どもたちができるようになっていると感じます。「自分から進んで」は、8割の子ができたかなと感じる日もあります。

本年度も半分が終わろうとしています。粘り強く指導を続けますので、御家庭や地域でも引き続き、声かけをお願いします。

抵抗力を高めましょう (十分な睡眠 適度な運動 バランスのとれた食事)